

口駒ヶ谷遺跡・飯岡遺跡発掘調査概報

1983

田辺町教育委員会

口駒ヶ谷遺跡・飯岡遺跡発掘調査概報

1983

田辺町教育委員会

例 言

- 1 本書は、田辺町教育委員会が行った京都府綴喜郡田辺町大字三山木小字口駒ヶ谷に所在する口駒ヶ谷遺跡の発掘調査概要と田辺町大字飯岡小字中峯に所在する飯岡遺跡の発掘調査概要の報告である。
- 2 調査の組織は次のとおりである。
 - 〈口駒ヶ谷遺跡〉
 - 調査主体・・・田辺町教育委員会
 - 調査担当者・・・田辺町教育委員会社会教育課 西川 英弘
 - 同 上 鷹野一太郎
 - 調査事務局・・・田辺町教育委員会社会教育課
 - 〈飯岡遺跡〉
 - 調査主体・・・田辺町教育委員会
 - 調査担当者・・・田辺町教育委員会社会教育課 西川 英弘
 - 調査事務局・・・田辺町教育委員会社会教育課
- 3 本書の執筆・編集は鷹野が行った。

目 次

| | | |
|---|--------------|----|
| 1 | 口駒ヶ谷遺跡発掘調査概要 | |
| 1 | はじめに | 1 |
| 2 | 調査概要 | 2 |
| 3 | 出土遺物 | 10 |
| 4 | まとめ | 13 |
| 1 | 飯岡遺跡発掘調査概要 | |
| 1 | はじめに | 43 |
| 2 | 調査概要 | 44 |
| 3 | 出土遺物 | 47 |
| 4 | まとめ | 50 |

1 口駒ヶ谷遺跡発掘調査概要

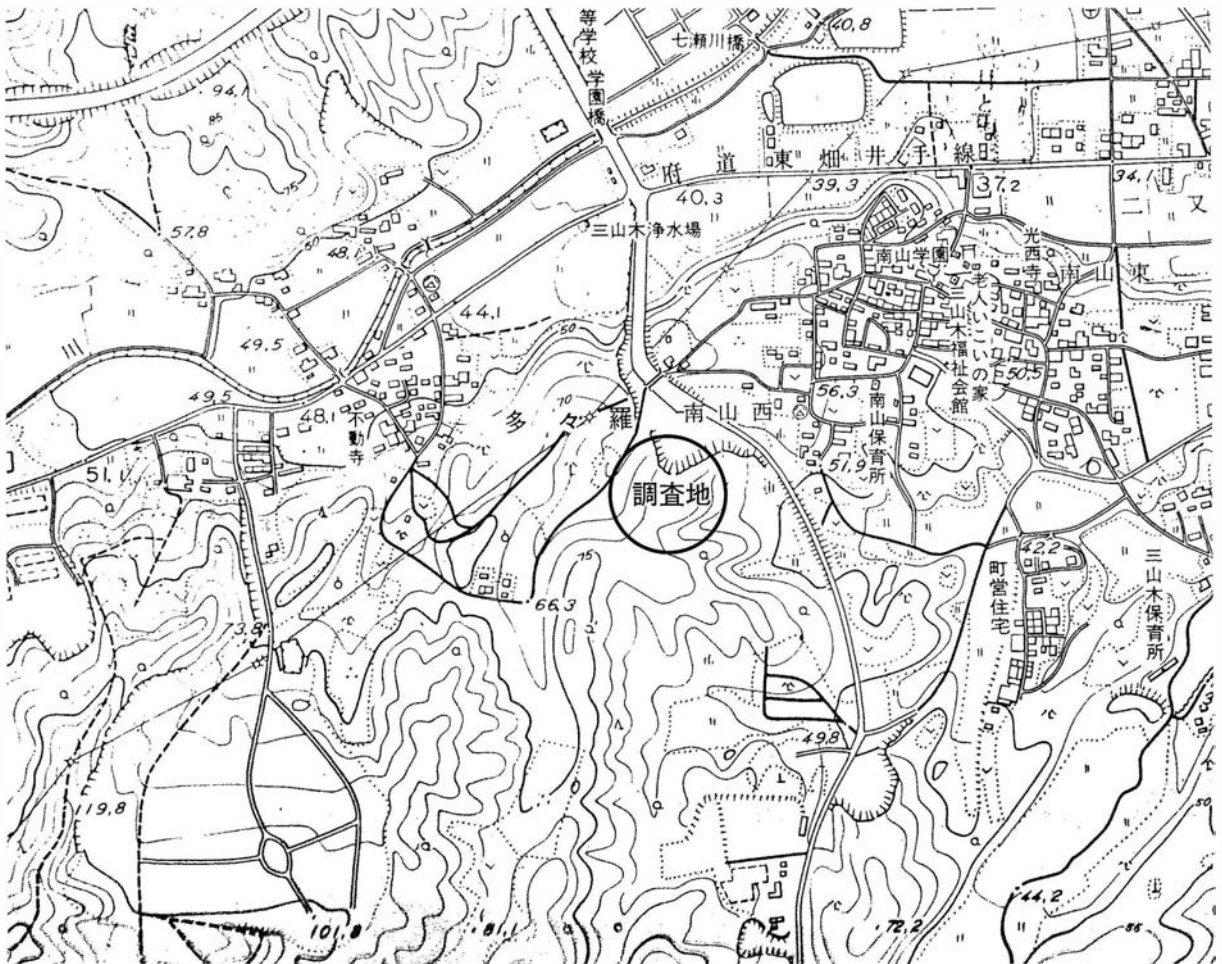
1 はじめに

口駒ヶ谷遺跡は、田辺町南部、大字三山木小字口駒ヶ谷の丘陵上に位置する。同志社校地のある丘陵とは普賢寺川を挟んだ南側の丘陵上にあり、標高は約70mである。

宅地造成にともない昭和55年度に分布調査を行い、昭和56年度に試掘調査を実施、中世の館城跡であることが推定され、このたびの調査となったものである。

調査は住友商事株式会社の依頼を受け実施した。

現地調査は昭和57年4月26日に開始し昭和57年12月21日に終了した。



調査地位置図 (S=1:10,000)

2 調査概要

遺跡は標高約70mの丘陵頂部平坦面に立地し、平坦面は東西約110m、南北約60mを測る。丘陵東北部は過去に土取りされ、大きな崖になっている。

館城跡は東西二つの郭に分かれ東郭が主郭とみられる。

東郭

建物跡 (SB19・SB10)、池跡 (SG29)、柵列跡 (SA20)、溝 (SD05・SD06・SD08)、土器だめ (SK04)、土器埋納坑 (SX11)、土壇、ピットなどがある。東端には土塁がみられ、南辺には帯曲輪がつき、その南に東西方向の堀 (SD15) がある。この堀は東部で曲輪に変化している。東西両郭は南北方向の堀 (SD01) によって分けられ、西郭の南側にも東西方向の堀 (SD02) がある。これら3本の堀は1点に集まり、そこにはY字形の土橋がつくられている。

礎石建物跡 (SB19) 郭の西よりでみつかった南北3間×東西1間以上 (7.2m × 3m 以上) の建物跡で東柱にも小さめの礎石を用いている。西側と南側に縁が付くとみられる。礎石のまわりからは多くの土器類、炭がみつかった。この建物の西側と北側には柵 (SA20) があるほか、西側では柵との間に池 (SG29) がある。

池跡 (SG29) SB19の西側にある池跡。南北4m、東西2mで蝶が羽を広げたような平面形を呈する。底、斜面には長めの扁平な石が張り巡らされている。

柵列 (SA20) 礎石建物と池の西側と北側にある柵列。西側で南北9m、北側で東西6.3m以上を測る。

溝 SD05 礎石建物跡 SB19の南側にある東西方向の溝、中央部で途切れる部分があるが、延長10.4mを測る。

土器だめ (SK04) 西柵列の柱穴の上に重なってみつかった土器を大量に含む土壇。南北3m、東西2mを測る浅いもの。

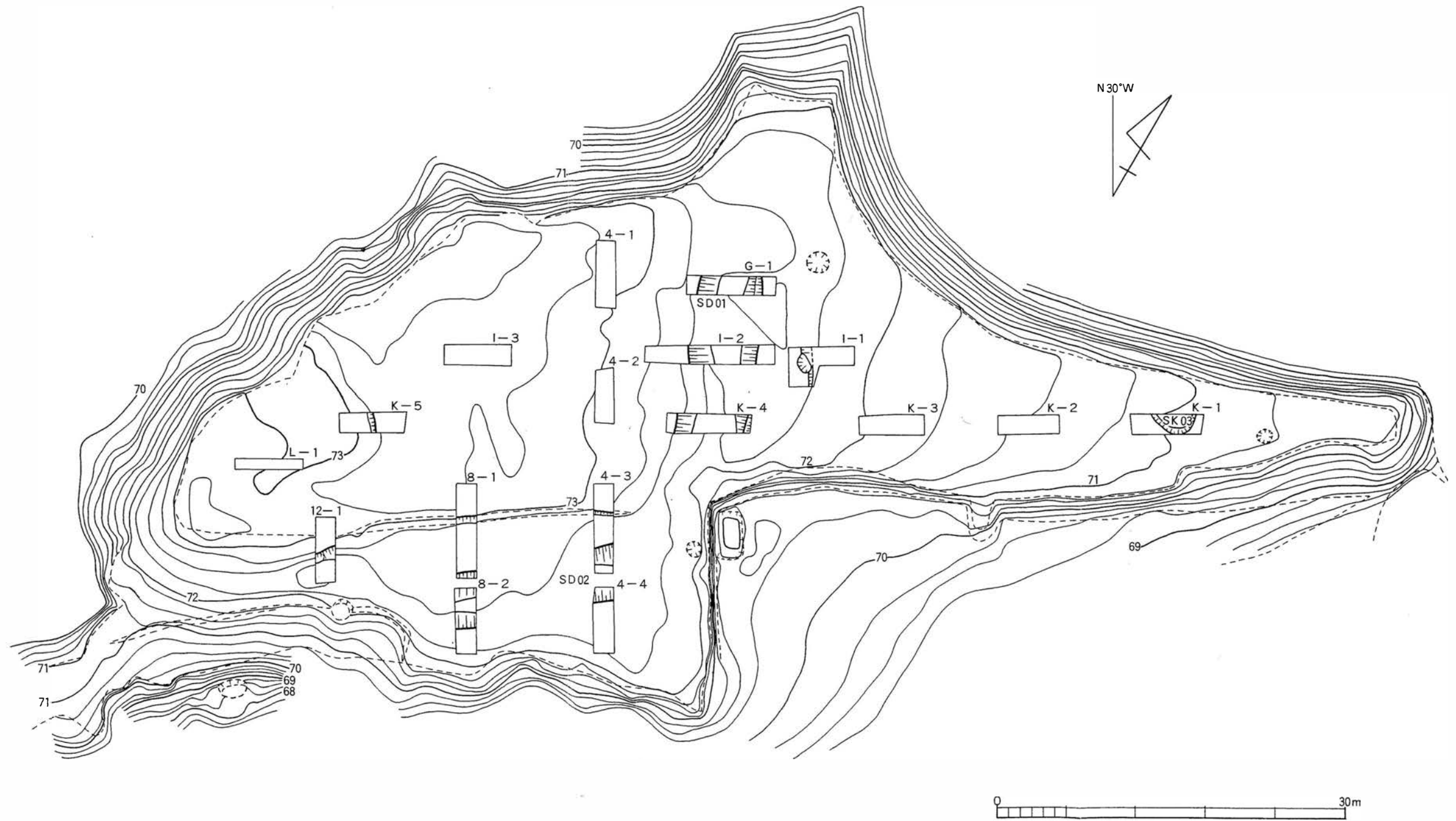
掘立柱建物跡 (SB10) 郭の中央部でみつかった南北2間×東西2間 (4.4m × 3.6m) の建物跡。南西隅の柱穴には根石がみられる。

土器埋納坑 (SX11) 郭の東南隅にある。意識的に土師器の鍋を正位に埋めたもので、鍋の底から土師器の皿が2枚重なり、逆位にあった。上部から転落したものとみられる。

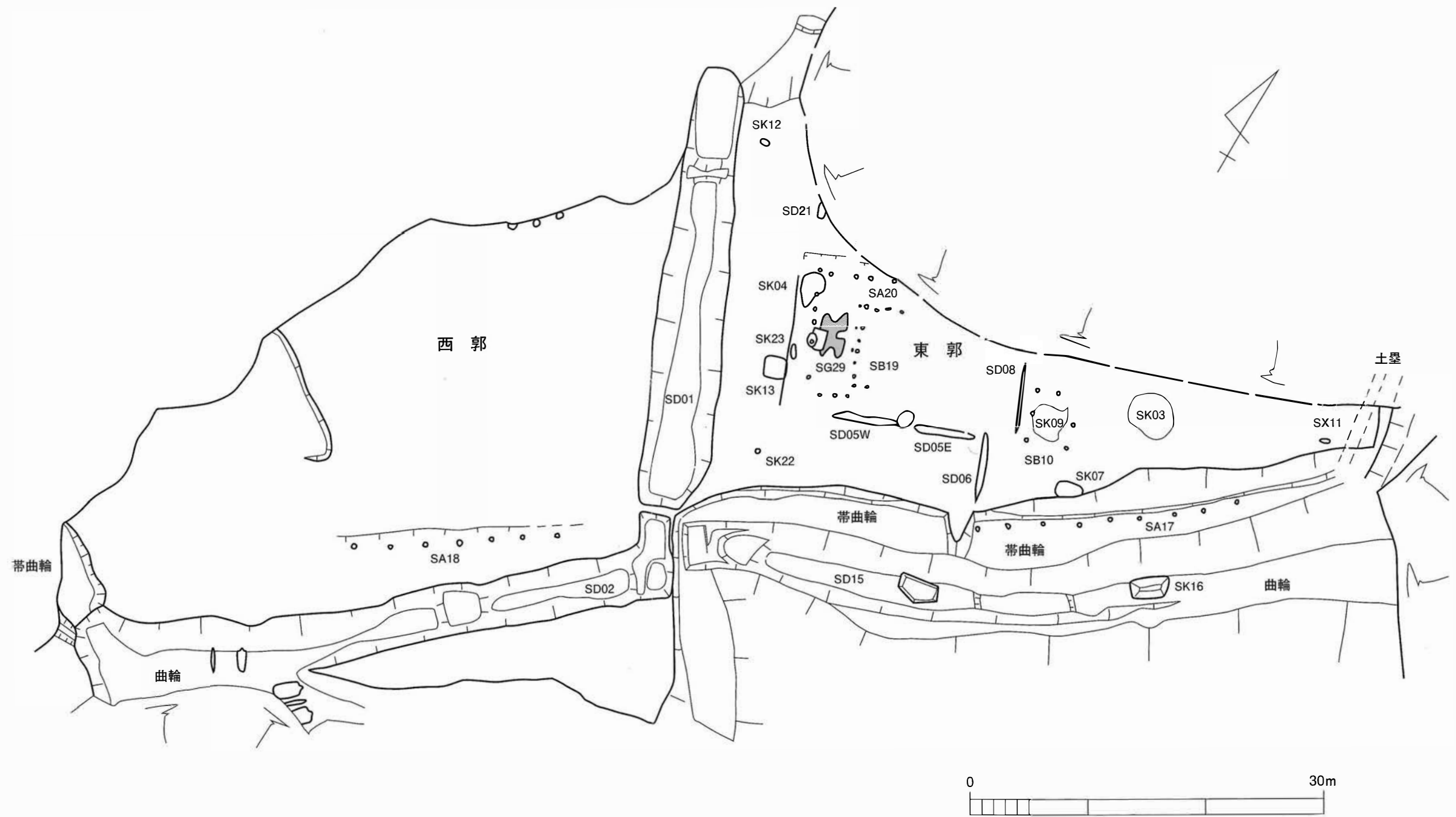


1. 興戸城跡 2. 都谷館跡 3. 新宗谷館跡群 4. 館跡 5. 館跡 6. 大西館跡 7. 水取城跡 8. 小田垣内遺跡 9. 館跡 10. 館跡 11. 西平川原館跡 12. 口駒ヶ谷館跡 13. 南山城跡

周辺の城館跡分布図



調査前地形図 (試掘調査時)



調査平面図

帯曲輪 郭の南側に一段低く削った帯曲輪があり、その中央には狭く削り残したところ（土橋）があり、西と東に分けている。西と東では高さが異なり、東側には柵列（SA17）が9間分（長さ25m）存在する。この帯曲輪のさらに南側には堀（SD15）が造られている。堀は長さ約50mあり、帯曲輪から堀の底までは深いところで3mを測る。堀は東にいくと南側の堤がなくなり、曲輪に変わる。その変化するあたりに大きな四角の穴（SK16）がある。落とし穴であると考えられる。

土塁 郭の東端に高さ0.5m、幅約3mの南北方向の土塁がある。また、礎石建物跡の西側の柵列の西側もやや高まりをみせ、ここにも南北方向の土塁があった可能性も考えられる。この土塁(?)の東辺と辺をあわせたようにほぼ四角形の土壇（SK13）があり、底には大きな石や瓦器椀・瓦器羽釜などがあり、何らかのまつりごとを行ったようにもみうけられる。

なお、この東郭の北東部は過去に大きく土取りされているので、郭の全体についてはよくわからない。

堀（SD01） 東郭と西郭の間に幅6m、深さ約2mの南北方向の堀があり、長さは38m残っている。南端から北に約29m付近に一段低いが土橋を設けている。北端はそのまま丘陵斜面につながっているようにみられる。堀の東壁底近くからは多くの遺物がみつっている。また、西郭の南側にも、郭を囲むように堀（SD02）がある。幅4～5m、深さ0.3～1.5m、長さ50mで東西両端とも北へ5m程屈曲している。この堀もSD15と同じように途中で曲輪に変化し、その曲輪部分から大量の炭・灰・焼土がみつき、炭焼き用とみられる窯がみつかった。

このように堀は3本みつかったが、バラバラにあるのではなく、端はみな1か所に集まり、複雑な土橋をつくっている。

土壇SK03 東方でみつかった径約4mの浅い穴。棧瓦や新しい時代の磁器などがみつかった。地元の話では明治初期にこの場所に剣術などの練習場（「南山郷士文武練習所」などと呼ばれていたらしい）があったとのことであり、それに関連したものであろう。

西郭

西郭にはあまり遺構がみられない。

南側と西側に一段下がる段差を設け、南側の段差と堀（SD02）との間に東西方向の柵列（SA18）、6間分、長さ18mがある。

北東部分には柱穴のようなピットがいくつかあり、建物があつた可能性も否定できない。また、西端に帯曲輪がつくが、その南側に小さな溝があり、この溝と堀（SD02）西端の北に延びた部分とで背後の丘陵地帯と一線を画している。

南北斜面

土塁や豎堀の可能性を求めて、斜面の調査も行ったが、水の浸食により形成された地形とみられた。ただ堀（SD01）北端から北に7mほどのところには小規模な削平地がみられた。

弥生時代の遺構

東郭から4か所、弥生時代中期の土坑（SK07・SK09・SK12・SK22）がみつかった。

3 出土遺物

遺物は大半が東郭と堀 SD01・堀 SD15からのもので整理箱にして10箱分の遺物がみつかった。中国製の青磁椀・白磁、国産陶器では信楽のすり鉢、瀬戸系の灰釉椀・鉄釉小壺のほかは土師器の皿・羽釜、瓦器の椀・羽釜・火鉢、須恵器、金属製品の鉄釘・刀子、石製品の硯・砥石がある。これらのほか、少量だが弥生時代中期の土器がみつまっている。

SK04（1～11）土器だまり SK04の土器である。1～8は土師器の皿、9・10は瓦器の椀で胎土には砂粒が多く含まれている。11は瓦器の鉢である。

SD01（12～17）中央の南北方向の堀 SD01の土器である。12～15は土師器の皿、16は瀬戸系の天目椀、17は瀬戸の灰釉平椀である。

SD15（19・25・27）東郭の南側の堀 SD15の土器である。19は中国製の青磁椀、25は須恵器の底部、27は瀬戸の灰釉大平鉢である。

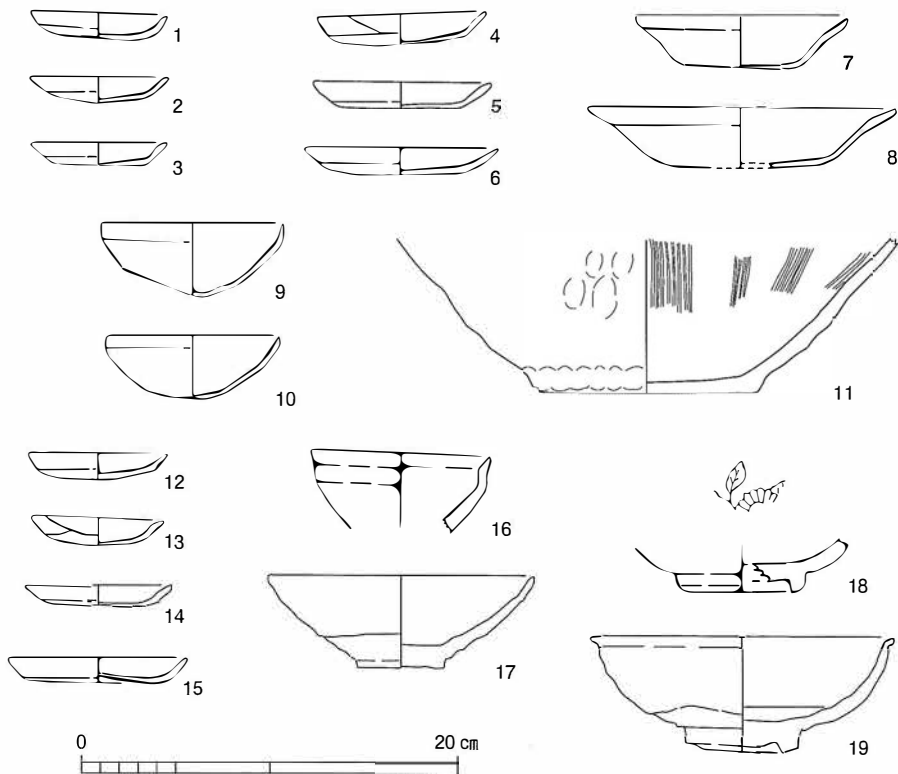
表土（18）昨年度に表土から採集した青磁椀である。

SX11（20～22）土器埋納坑 SX11の土器である。20・21は土師器の皿、22は土師器の鍋である。

SD05（23）礎石建物跡 SB19の南側にある溝 SD05の瓦器の小壺である。

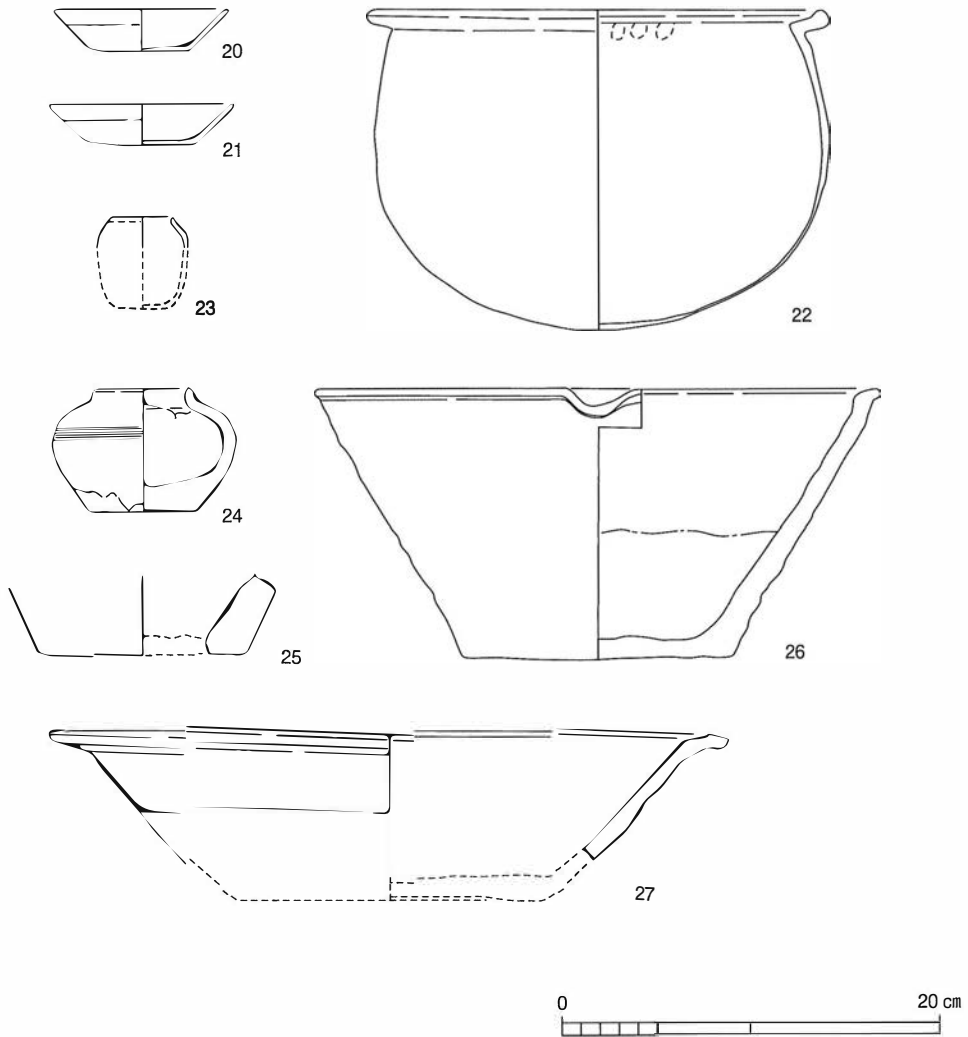
北削平地（26）堀 SD01北西の小削平地の信楽のすり鉢である。

遺物包含層（24）瀬戸の鉄釉小壺である。



- | | | | | | | |
|------|---------|-------|---------|---------|---------|----|
| SK04 | 1 ~ 11 | 土師器：皿 | 1 ~ 8 | 瓦器：椀 | 9・10, 鉢 | 11 |
| SD01 | 12 ~ 17 | 土師器：皿 | 12 ~ 15 | 陶器（瀬戸）： | 16・17 | |
| SD15 | 19 | 青磁椀 | | | | |
| 表採 | 18 | 青磁椀 | | | | |

遺物実測図 (1)



SX11 20～22
 SD05 23
 SD15 25・27
 北テラス 26
 包含層 24

土師器：皿 20・21, 鍋 22
 瓦器：小壺
 須恵器：底部 25, 陶器（瀬戸） 27
 陶器（信楽）
 陶器（瀬戸）

遺物実測図（2）

4 まとめ

昨年度の試掘調査では、漠然と室町時代頃の館跡か城跡ではないかとみられたが、今回の全面調査により緊迫時の城というよりも館に近い遺跡であることがあきらかとなった。時期については、東郭東南隅部でみつかった土器埋納坑（SX11）を造館時の地鎮祭と考えれば、使用された土師器の鍋・皿から14世紀後半（南北朝時代末頃）に造館が求められ、ほかの土器から15世紀前半の廃絶とみることができよう。

この館跡は東郭南辺で少量ではあるが盛土による整地がみられ、また、複雑な土橋の組み合わせ、背後丘陵との画し方などの新しい様相と一辺50mもの平坦面をもつ郭という古い様相がみられる平安・鎌倉時代的な城館から戦国時代的な城館への移行期のものといえよう。

館の主については不明であるが、普賢寺谷衆との関係は無視できないであろう。南北朝の争乱にともない平地の居館から安全性を求めて丘陵上の館を求めた結果によるものかもしれない。

また、弥生時代の遺構・遺物が広範囲からみつかったことは注目されよう。田辺町ではさほど高所ともいえないような丘陵からかなりの確率で弥生時代中期の遺物がみつまっている。すぐ北側の同志社校地には弥生時代後期の高地性集落として知られている田辺天神山遺跡が存在するが、今回みつかったのは中期であり、関連性は不明である。

図

版

図版 第 1



(1) 調査前全景 (北から)



(2) 調査前 (東から)

図版 第2



(1) 全景 (北から)



(2) 東郭全景 (北から)

図版 第3

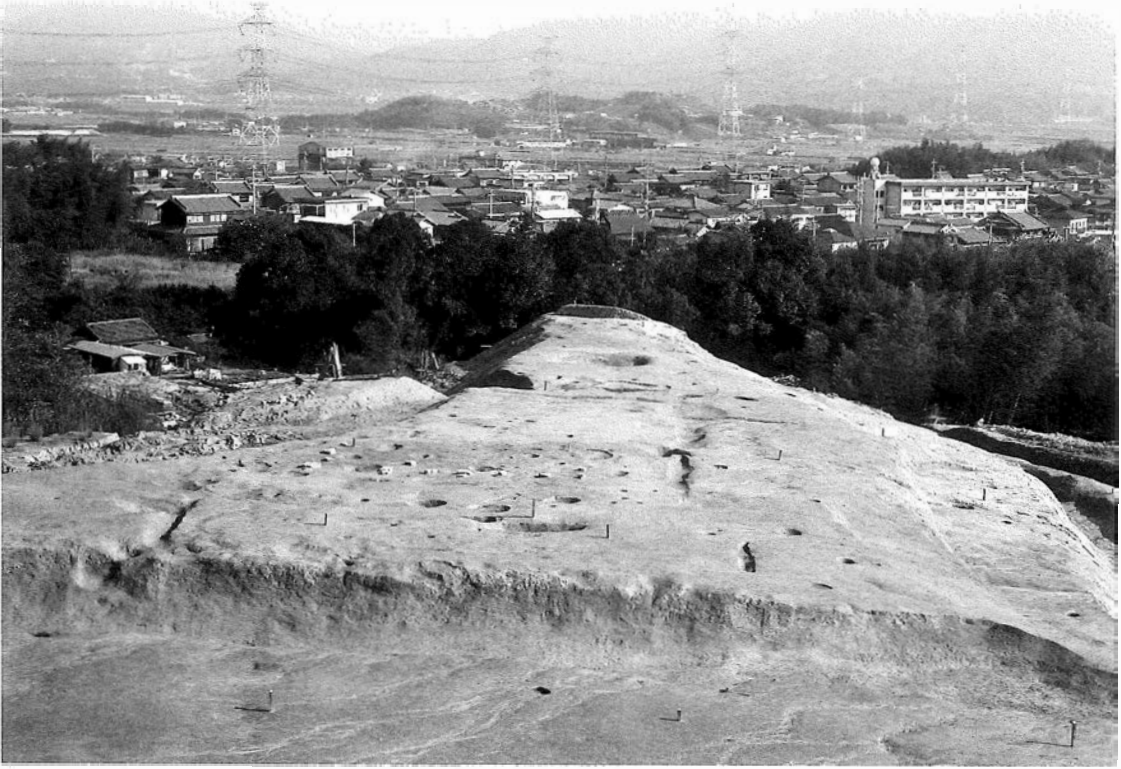


(1) 全景 (東から)



(2) 南辺部 (東から)

図版 第4



(1) 東郭全景 (西から)



(2) 西郭南部と SD02

図版 第5



(1) 西郭 (東から)



(2) 西郭の南辺部 (東から)

図版 第6



(1) 全景 (南西から)



(2) 堀の集結点 (南から)

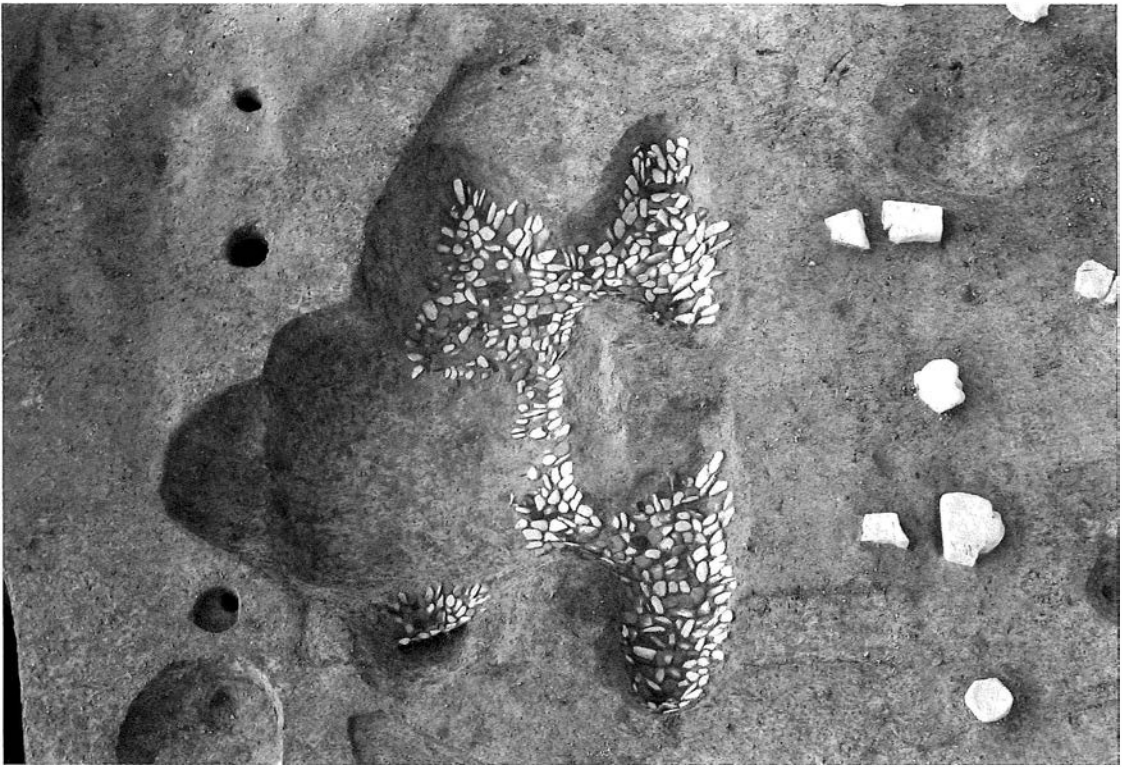
図版 第7



(1) 堀の集結点と土橋（北東から）



(2) 礎石建物跡 SB19 と池跡 SG29（南から）



(1) 池跡 SG29 (南から)

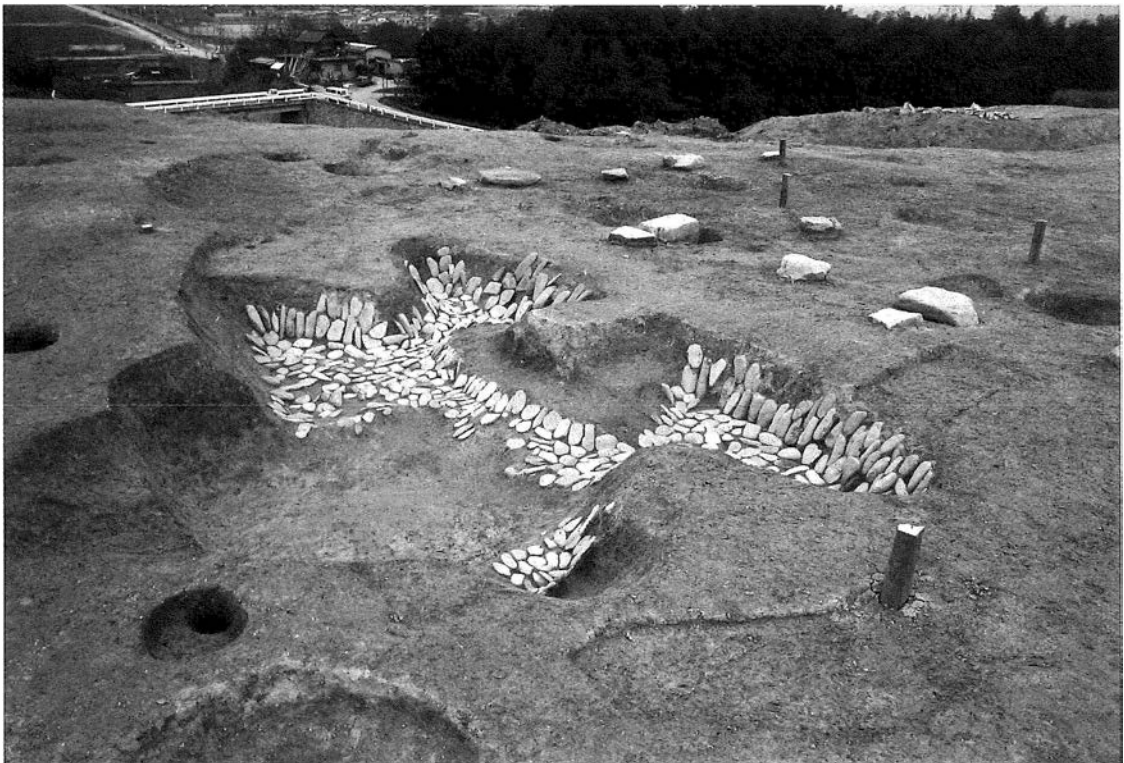


(2) 池跡 SG29 と礎石建物跡 SB19 (西から)

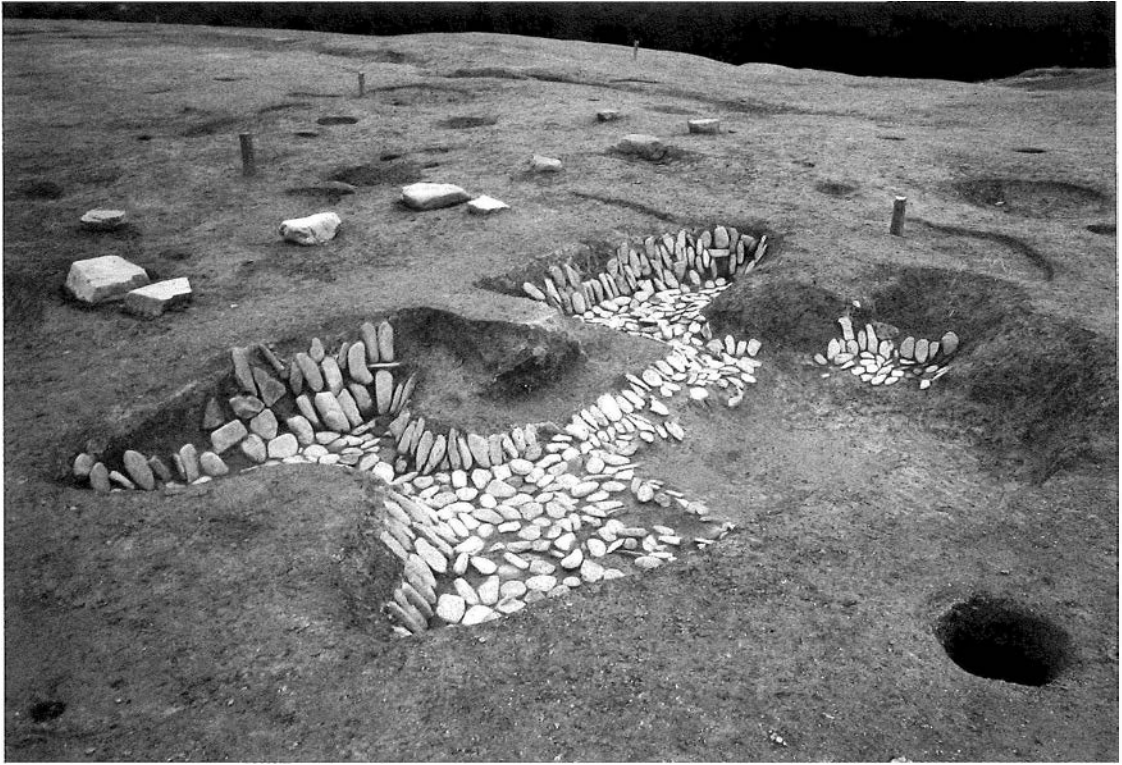
図版 第9



(1) 東郭中心部 (西から)



(2) 池跡 SG29 (南西から)



(1) 池跡 SG29 (北西から)



(2) 同上部分



(1) 池跡 SG29 (北から)



(2) SK13 (南から)

図版 第12



(1) SK04 (北から)



(2) SX11 (南から)



(1) SX11 (南上から)



(2) SX11 (復元)

2 飯岡遺跡発掘調査概要

1 はじめに

飯岡遺跡は、田辺町東部の木津川沿いにある独立丘陵である飯岡丘陵に所在する弥生時代を中心とする集落跡とみられるが、次の古墳時代の飯岡車塚古墳をはじめとする飯岡古墳群のある丘陵として広く知られている。今回の調査はこの丘陵頂部を巡るように農道を建設するものであり、その事前調査として実施した。

調査は田辺町農政課の依頼を受け実施した。

現地調査は昭和57年2月24日に開始し昭和57年3月31日に終了した。



調査地位置図 (S=1:10,000)

2 調査概要

今回の調査地は標高約60mの丘陵頂部平坦面に立地し、農道の形状にあわせ南北にトレンチを設定した。調査により、弥生時代後期の方形周溝墓2基のほか同時期の溝、古墳時代後期の遺物を含む溝などがみつかった。

方形周溝墓 SX01

周溝の東コーナー部分がみつかったもの。周溝は東辺が幅1.1m、南辺が幅1.6mを測る。主体部がみつかったものではないが、直角に曲がるコーナーと溝から弥生土器がみつかったことで方形周溝墓の周溝と判断した。

方形周溝墓 SX04

方形周溝墓 SX01同様、周溝の南西コーナー部と北西コーナー部がみつかったもの。北西コーナー部は後の時代の溝 SD03と重なっている。溝心々で南北約11mを測る。遺構確認面の地形が北に向け下がっていくため、西溝の南方では幅1.2m程だが北方では幅0.5mほどである。南溝は一部だが幅2mを測る。

溝 SD05

方形周溝墓 SX01の南側でみつかった東西溝。幅2.5～3mを測る。SX01の南辺と平行するようにもみえ、弥生土器がみつかったことから方形周溝墓を区画する溝かとも考えたが、よくわからない。溝の南側に溝に付属するようにピットが2か所みつかった。

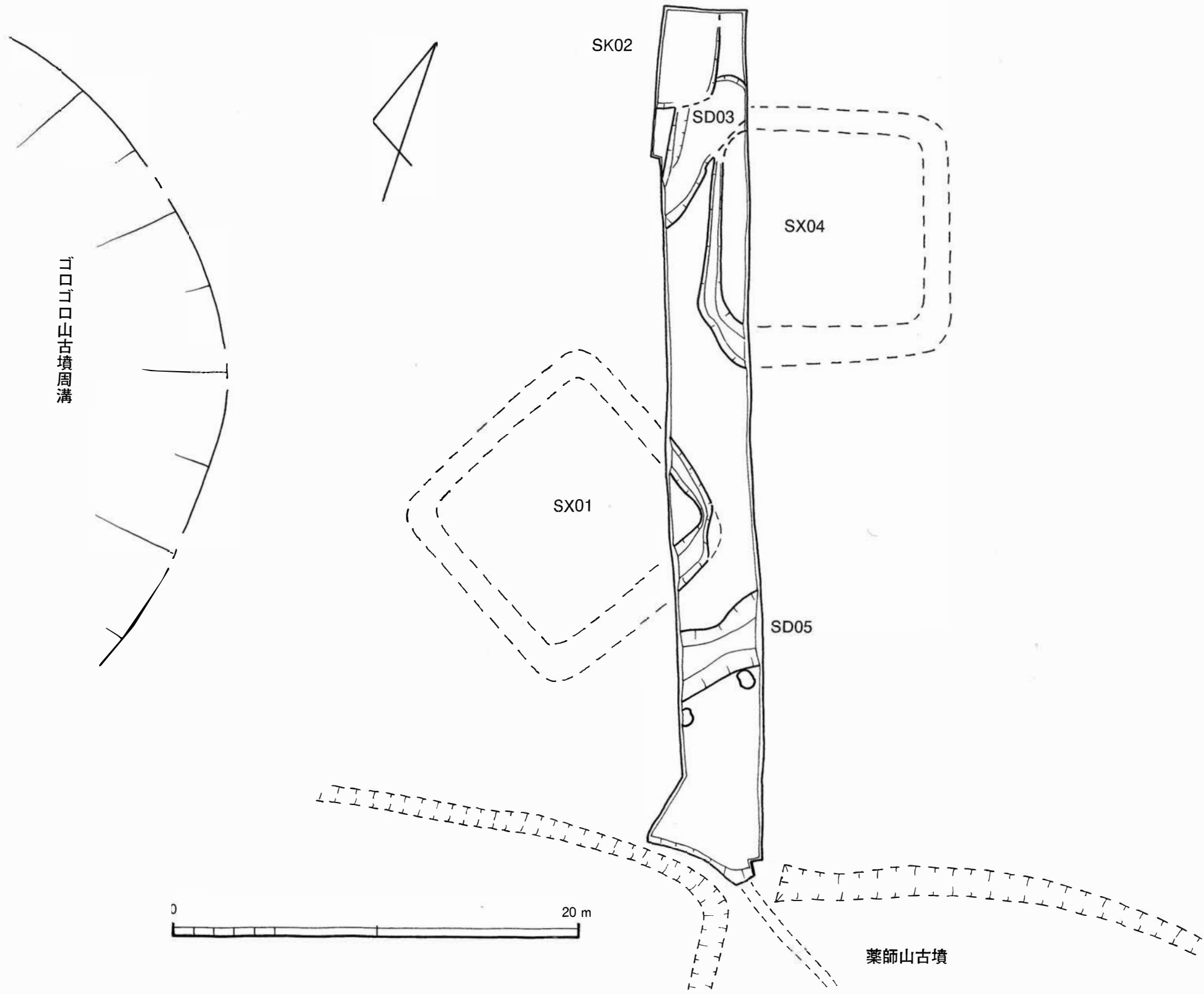
この溝から約10m南には薬師山古墳があり、可能な限りトレンチを延ばしたが古墳に関係したような遺構・遺物はみつからなかった。

溝 SD03

古墳時代後期の遺物を含む南北方向の溝。幅2～3m程度。

土壇 SK02

トレンチ北端でみつかった土壇。溝 SD03より新しい。



調査前平面図

3 出土遺物

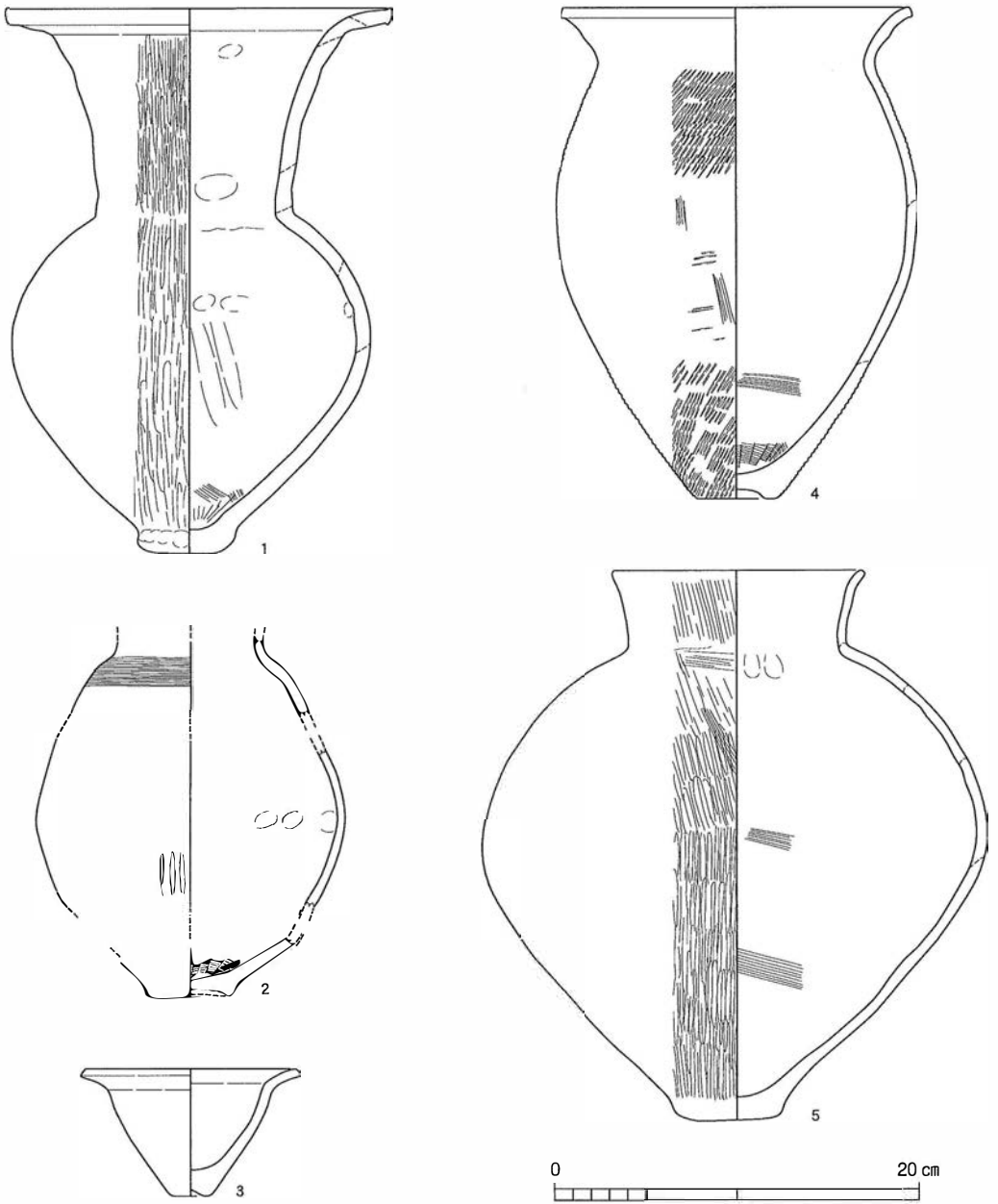
方形周溝墓の周溝や南側の溝 SD05などから弥生時代の壺・甕、石鏃などがみつまっている。

SX04（1～4）北側の方形周溝墓の周溝の土器である。1は長頸壺でていねいな縦方向のヘラミガキが施されている。2は壺、3は鉢、4はカメである。

SX01（5）南側の方形周溝墓の東辺周溝の壺である。体部には縦方向のヘラミガキが施されている。

SD05（6～9）SX01の南側の溝の土器である。すべて壺である。

これらは弥生時代後期でも前半に属するものとみられる。



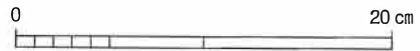
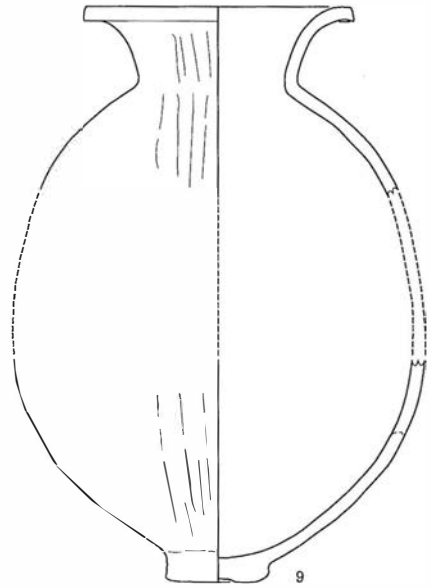
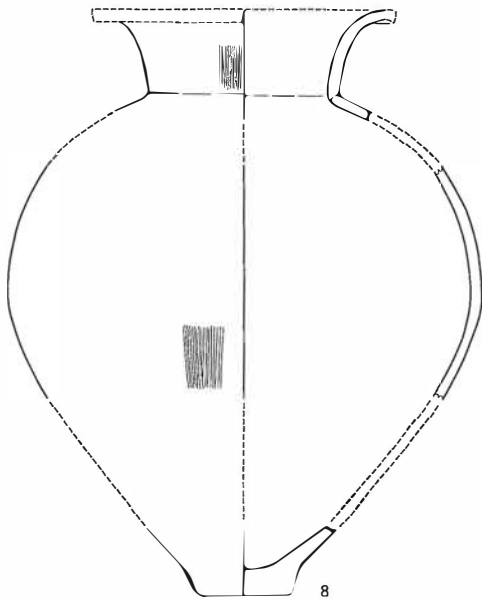
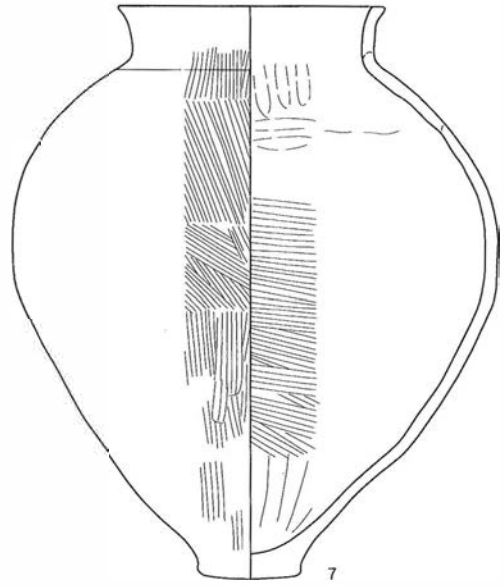
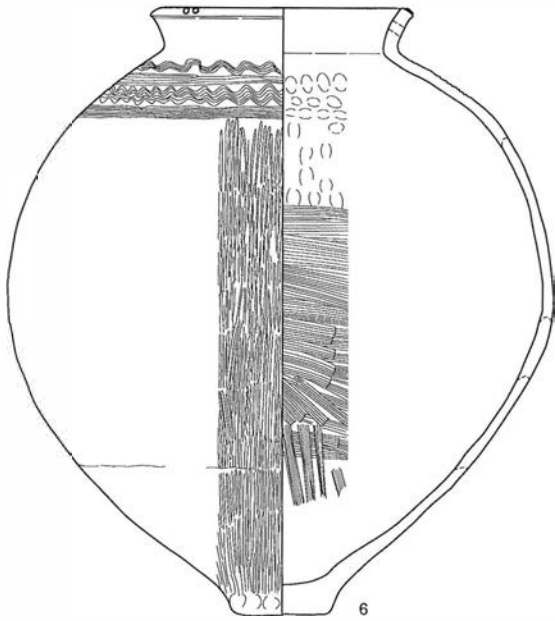
SK04 1~4

弥生土器：壺 1・2 鉢 3 カメ 4

SX01 5

弥生土器：壺 5

遺物実測図 (1)



SX05 6~9

弥生土器：壺 6~9

遺物実測図 (2)

4 まとめ

飯岡古墳群の立地する飯岡丘陵の頂部で行った調査であった。丘陵東南部でかつて弥生代後期の竪穴住居跡がみついているが、今回は同じ弥生時代後期の方形周溝墓が2基みつき、飯岡丘陵における土地利用を考えるうえで大きな発見となった。古墳以前の弥生時代、丘陵頂部には墓域が、丘陵上でも低い部分には住居が営まれるという構図がみつかったことになる。それぞれの範囲がどの程度あるのかは不明であり、また、方形周溝墓は後期でも前半のものであり、古墳時代にどのようにつながるのか今後の調査に期待される。

圖

版

図版 第 1



(1) 調査前 (北から)



(2) 薬師山古墳 (北西から)

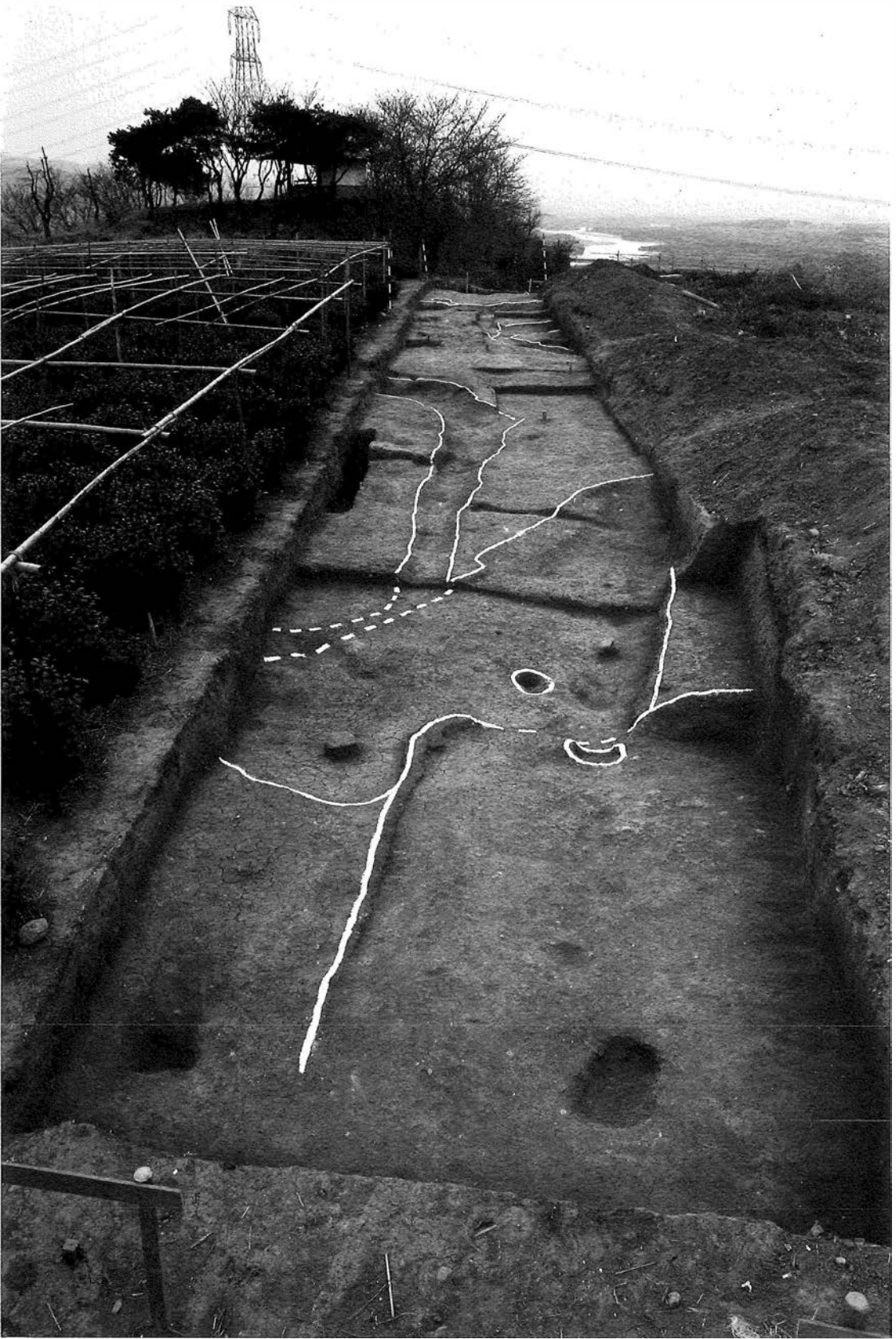
図版 第2



(1) 全景 (南から)



(2) 同上



全景（北から）

図版 第 4

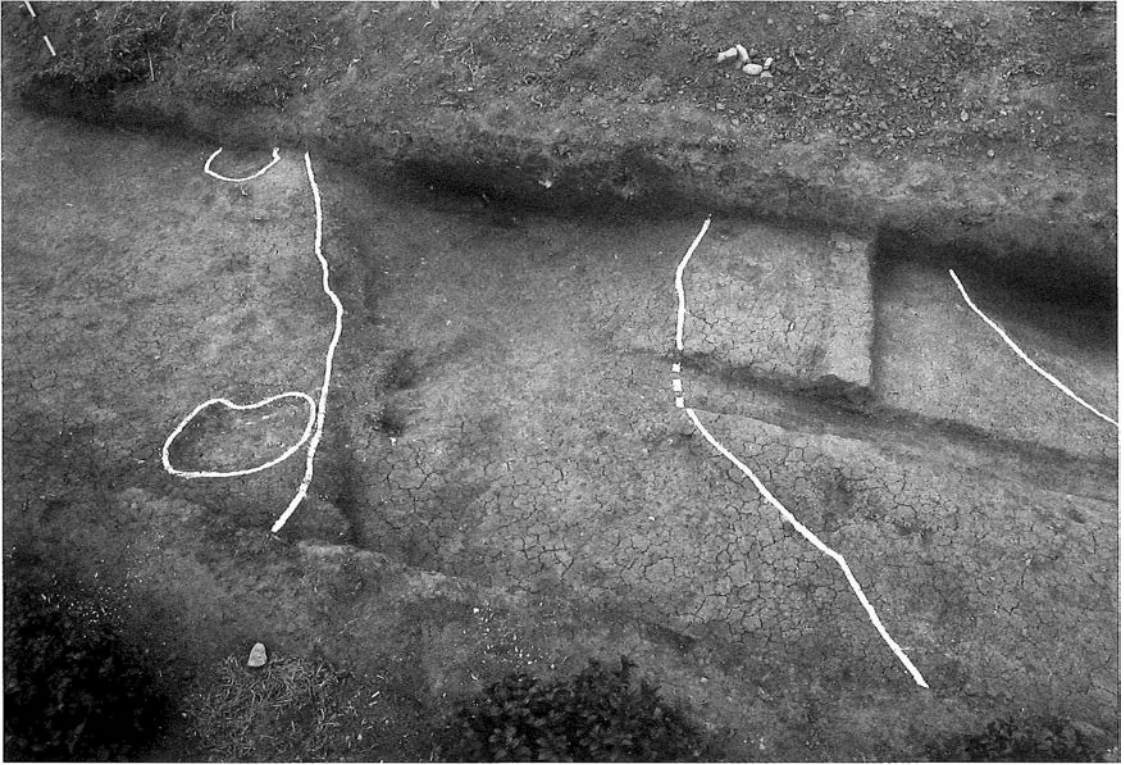


(1) SX04 (西から)



(2) SX01・SD05 (北西から)

図版 第5



SD05 (東から)

昭和58年 3月31日 発行

口駒ヶ谷遺跡・飯岡遺跡発掘調査概報

(田辺町埋蔵文化財調査報告書 第5集)

編集・発行 田辺町教育委員会
〒610-03 京都府綴喜郡田辺町
大字田辺小字丸山214番地
電話 07746-2-2552

印刷 株式会社奈良明新社
〒630 奈良市橋本町36
電話 0742-63-0661